

これまでのほとんどの絵画はわれわれをとりまく現実の世界——三次元の世界を、二次元の画布に写しとることであった。いわゆる具象絵画(再現的な絵画)である。ところがよく考えてみると、三次元の対象を二次元の画布に移しかえるという仕事はもともとドダイ無理なハナシであって、それはイリュージョンに過ぎないのではないか?という気がしてくるのである。

絵画の枠組みは二次元の平面であり、二次元の画布へは二次元の“かたち”と“色彩”があればそれでもう充分なのだ。画面に具体的な見なれた事物が見つからないので、非具象絵画ないし抽象絵画はワカランという人が多いが、もともと非具象絵画には具象的な事物と無縁の場合も多いから、当然といえば当然である。二次元の世界のなかで三次元の世界をさがしてもこれはムリである。この次元の違いを認め、絵画の二次元性、平面性さらに絵画自体の自律性に波長を合わせ得たとき、新しい世界——非具象絵画——は自分のものとなる。

歴史は連続している。モネの晩年の水蓮の諸作品、セザンヌの晩年の風景とくに水彩、マチスの切り紙のコラージュ等々にみられる平面性、同質性、中心喪失性は現在の新しい絵画の可能性をすでに孕んでいる。山田さんの作品もこれら先達の仕事と関連をもつ。

また、絵画を如何に考えるか、この問題の意識の有無は現代作家にとって大きな意味をもつ。当然、その考え方は多岐に分れる。非具象絵画といっても、すでに70年の歴史をもちその内容は多様で一概に言えないほど豊かになってきている。一人の作家をひとつのイズムにあてはめるのは無理がある。作家はイズムで仕事はしない。自分の考えで自分の世界を構築する。山田さんの絵をみ、二人で話し合いながら、このことをつくづく思ったことであった。

今回の展示は、1968、69、70年のストライプの作品である。60年から始まったこの形式が成熟した時期である。山田さんの絵を見て感ずることは洗練されていること、ナマのニオイがなく丁寧だということである。同時にスタテックで重いところが小生には魅力である。とくに68~70年の作品についてそう思う。フォービズムや、アンフォルメルに見られる刺激的、感情的な余計な身振りが無い。またオブジェ的な要素とも無縁である。絵を描くとき定規やテープは使用しない。テープなど使うとトリッキーなものになりますからネェ——と山田さんはニヤリとしながら言う。飽くまでペインタリティに徹している。

最後に、この展覧会のために藤枝晃雄さんから一文をお寄せいただき感謝している。藤枝さんは山田さんの仕事を長年注目し評価してこられた方だけにこの論稿は山田さんの仕事を理解するために最適のものと言えよう。なお、巻末に作家の略歴および作家に対する批評(71年以降)等の一覧表を掲載している。ご参考となれば幸いです。

1979年10月22日 佐谷画廊

佐谷和彦